

羅說人身竊理

卷一



羅說人身窮理

一



人身窮理小解序

予カ今記定スル^{和蘭國ニ公ニ在ル}此小冊子ハ其原本文章簡

約ニメ論理精詳故ニ予カ常ニ甚タ愛スル^要此ノ

者ニ歎ルニ我邦中邦語ヲ以テ著セル人身窮理

ノ各未タ曾テ此ノ如キノ善本アルヲ見ス是レ

予カ繙訳ノ為ニ時日ヲ費ス^一ヲ企シ所以ナリ

且ツ此各ヤ唯医家ノ為ノミナラス亦常人ノ為

ニ著述セル者ニメ殊ニ常人ハ^{大學長ノ講席ニ時スルヲ得サ}本論ヲ解シ得サ^{以テ}

ル者多シ故ニ予自其淺陋ヲ省ミス篇中一二ノ

部分ニ於テ廣ク^{晩近}諸各ヲ纂集メ註解ヲ加^{以テ本論ノ旨ヲ}而メ其

註明

其
訳文ハ皆勉テ「シ」ゲンベ「キ」人ノ綴辞法ニ从
テ此ヲ綴ルト虫凡亦何ソ能ク多クノ謬悞ナキ
一ヲ得ンヤ願クハ學者宜ク能ク之ヲ校正改革
メ善本ナラシメハ予カ大幸亦何ソ此ニ過ン予
今復タ別ニ某劑各訳述ノ場メノ辞スヘカラサ
ル者アツテ甚タ忙閑ナルカ故ニ一々此各ノ謬
悞ヲ校正スルノ暇ヲ得ス

訳者

ア井ブマ書

人身窮理學小解 和蘭一十年
百九千行

高獨逸都

僱説

著

和蘭

英布蘇

訳註

備中

緒方章洪菴

重訳

題言

第一章 人身窮理ノ學タル各人ノ見ニ從テ各々其端ヲ
異スト虫ト凡之ヲ総フルニ唯是生活健康スル
人身ノ自然ヲ明ムルニ在ル

詳註
此學ノ基本トナリ
羅回ニ之ヲヘ

故余今其語意ニ從シ、且其原由ニ基テ人身ハ「一ニ一ニ」セ
究理學ノナリ「ア」ニト「ホ」ヨギ「ハ」人身學ノ義ナリ以テ此學ノ真意ヲ知ルヘシ
名ラ下セリ

第二、○見故ニ此學ヲ人身ノ自然ヲ知テ疾病ヲ療セ
ニトスル徒ノ宜シク知ラサルヘカラサル最大
要緊ノ者ナリ

第三、○夫レ人身ハ本ト見レ一個ノ小天地ニノ動物
ノ部類ニ属シ其體質分子一種固有ノ功ヲ具テ
萬物中ノ一物ナリ

第四、○凡ソ萬物中生活ヲ具有スル者之ヲ機生体ト
云機生体小ハ其体諸種ノ器械ヨリ合成シ其器

械各一箇ノ機動ヲ具ヘ其機動相合メ以テ其全
体ヲ生成營養スル者ナリ **且ツ植物ノ機能ヲ為ス**

注 凡ソ機生体ハ其質不同ノ者ヨリ成リ無機
生体ハ其質同種ノ者ヨリ成ル譬ヘハ今大
石ヲ取ツテ是ヲ破碎スルニ其分々大小形状各
々相違フト虫瓦其質ニ至テハ一モ相異ル者
ナク機生体ハ之ヲ分割スルニ分々皆相同シ
カラス又機生体ハ内部ヨリ生養シ無機生体
ハ外部ヨリ増育ス見機生死機生両体ノ区分
ノ大ナル者ナリ

第四下

○是故ニ機生体ノ性ハ一個ノ力ヨリ生ス其力タル体質中一分モ離ルヘカラサル者ニノ一モ之ヲ離ルレハ機生体タルヲ得ス向ノ其力ノ用タル機生体ノ全質ヲノ常ニ不斷ノ變動ヲ生セシム

第五

○凡ソ生活体ニ二種ノ別アリ其一ヲ動物ト云七其一ヲ植物ト云夫レ万物境機ニ感動シ隨意ニ舉動シ口腹ヲ以自在ニ其体質ヲ深養シ不斐ノ陰具ヲ有テ清氣ヲ吸ハスル但シ植物ハ之ヲ吐出スハ是レ動物ノ植物ト異ル所以ノ徴ナリ

人手植物

獸ノ別其

界限霄壤

ヲ為ル此非

注 夫レ人ト植物トハ其別固リ著大ニト蚕トソトヘイテシノ如キ植物性動物字義ト原名プラシト植物トノ別ニ至テハ其界限甚タ定メ難シ

然レ此細力ニ其各々固有ノ性ヲ以テ之ヲ考

レハ其別自ラ昭々タリ今其体ヲ合成スル原質ヲ以テ比較スルニ其原質ノ數動物ニ於テ

ハ植物ヨリ少ク凝流ニ体ヲ以テ比較スルニ動物ニ於テハ其凝体ノ量植物ヨリ少ク且ツ

植物ニ於テハ其合成原質ノ數少シト蚕モ動物ニ比スルニ其揮発少シ是レ動物体ニ於テ



ハ気状ノ窒質其多分ニ居リ植物体ニ於テハ
固性ノ炭質其基礎ヲ為セハ之○癸シ其動
植ニ物体ノ界限ヲ定ムヘキ最大較著ノ微候
ハ凡百ノ動物上ニ入ヨリ下植物性動物ニ至
ル迄有セサルモノナキ所ノ一個ノ空洞分註
即腸
曹ナリ其空洞内ニハ飲食消化ノ機能_在テノ
ノ内面ニ吸收ノ機能ヲ具フ其吸收ノ力之ヲ
体ノ外面ニ於ケル力ニ比スルニ最モ強ク其
機能ヨリ全体ノ栄養ヲ為ス(植物ニ在テハ此
機能ヲ体ノ外面具フ而メ此空洞ハ動体ニ在

テハ最大有用ノ部ニノ其動機尤モ強ク全体
ノ死メ既ニ心臓ノ鼓動ノ絶ユル後モ尚其蠕
動機ヲ保續ス

○人身窮理ノ學ニ二種別アリ其一ヲ普通ノ學
ト云ヒ其一ヲ各區別ノ學ト云フ夫人ノ体々
ル凝流ニ質ヨリ合成スル者ニメ其各部ノ運化
機能ハ一種ノ力ヨリ發ス其實質及セカヲ考究
スル之レヲ普通ノ學ト云ヒ各部ノ機能ヲ考究
スル之レヲ各已ノ學ト云フ

腕骨即チ小腹
下迄ノ骨田ナリ

腕骨平潤ニメ短矮腸骨及ニ相開ケテ耻骨合縫
ノ短キト女子ニ在テハ其陰具ノ製造及ヒ機能
他ニ異ルト即チ子宮ノ海綿様質處女膜月経等
ノ類男子ニ在テハ夢中ニ遺精ヲ為スト男女俱
ニ媾合ノ時ヲ定メサルト其他尚両手力拳動自
在ナルト立行スルコトヲ得ルノ美是レナリ

第二章

或人云人ハ四足ヲ以テ歩マサルカユヘニ其歩行
健固ナラス危害少カラス且ツ堅立スルニ由テ
登スルノ病ニ罹リ易シ故ニ四足行ハ乳養動キ

按三人胸膛狭
短ナラス今原文
ニ從テ訳ス後者
ヲ候ツ

物ノ本性ナリト焚レヒ人身ノ製造タル一個別
種ナルカ為ニ能ク其不足ヲ給補ス其較著ナル
者ハ即チ頭頸接続ノ快ト脊椎ノ製造ト下肢ノ
長大ニメ其筋骨軟帶上肢ヨリ強固ナルト肘臂
ノ内ニ撓ムト胸腔ノ狭短ニメ前ニ張レルト腕
骨ノ平潤ナルト尾骶骨ノ内部ニ曲レルト全身
重心ノ兩股骨頭ノ中間ニ正ク向フト諸關節ノ
製造ト胸腔及ヒ腹腔ノ内臓ノ状ト皆能ク堅立
スル聲適当ス唯々其堅立ノ身体ニ変ヲ為ス者
ハ少壯ノ後ニ於テ全身ノ長短毎ニ晚ヨリ大ナ

ルヲ得ル者ノミ

〔注〕其体長ノ変ハ殊ニ脊骨ノ每推ヲ相接続ス
ル較骨ノ伸長屈縮ニ由ル者ナリ

第三章

夫レ人身ノ製造ハ人々各相著シト血凡亦此レ
ニ三種ノ別アリ其一年齡ニ由ル者其二男女ニ
由ルモノ其三居地ニ由ル者是ナリ其初ノノニ
種ニ於テハ予將ニ後ニ詳ニ此ヲ證説セントス
故ニ今此ニ贅セス其居地ニ由テ形状色次ノ異
ルヲ以テ人ノ種族ヲ定メントスル寸ハ謬誤ヲ

為ス下少カラス何トナレハ其地產地ニ非スト
血凡其居ル下久シケレハ終ニ能ク相移変スル
者ナレハナリ

第四章

人身ノ原質タル此ヲ分析術ニ由テ考究スルニ
數種アリ曰石灰土曰鉄曰酸質曰硝石質按ニ是
即テ窒
質ノ曰燐曰炭質曰水質是ナリ此諸原質ハ体中
各部ノ異ルニ從テ其給合亦千差萬端ナリ

〔註〕窒質

名硝欲原基羅甸名

ノ人体中ニ於テ

過分ヲ為ス下予既ニ顯言中ニ於テ之ヲ説

ケリ温質モ亦動物体中ニ於テ缺クヘカラサル
ナリ緊要ノ原質ナリ

第五章

身体ノ部分之ヲ大別メニトス曰流体曰凝体

第六章

流体ハ即ケ人身中諸液ノ総名ニメ此ニ三種ノ
別アリ一ヲ血液ト云セ一ヲ未熟液ト云セ一ヲ
分離液ト云フ九ノ人身中ニ在テハ流体最モ具
多分ヲ為ス者ナリ按スルニ李奢蘭度曰百二十
シムル寸ハ十七日行ノ屍ヲ取テ電中ニ乾固セ
行トナル以テ流体ノ多キヲ知ルヘシ

第七章

凝体ハ是レ其質纖維質水液及セ膠質揮発香質
質ヨリ合成ス

注

流体ハ其成分凝体ト相違フコナク唯其合
成ノ状ノ互ニ相違フノミ九ノ凝流ニ体ノ別

ハ其質ノ剛柔ヲ以テハ成シ難シトス論ハ

腎ノ脂肪ノ如キハ其質腦髓ニ比スルニ甚タ

硬固ナク然レモ誰レカ能ク腦髓ヲ流体トシ

テ脂肪ヲ凝体トスル者アラシコレニ予

ハ人身ヲ分チ既機生体疑体ト未機生体流体トス

見レ流体ハ未タ十分ノ器械ナルヲ得サレ
ハナリ

第八章

凡ソ動物体及ヒ総テ機生体ノ基形ヲ為ス者纖維ナリ其纖維互ニ相排列ノ一平面ヲ為ス者之ヲ小板ト云フ

註動物体ノ成分相合メ凝体ヲ為スヤ其混合カト引カトヲ以テ互ニ相連接シ以テ一種ノ定形ヲ為ス^テ猶金屬資始ノ如シ其定形ハ即纖維之^故此ニ纖維ハ諸機生体ノ基礎ニ

第九章

其小板^{活物膠ニ}由テ迭ニ相接着合併シ以テ蜂窩状組織ヲ為ス此質ハ全身各部ニ在テ一種ノ液ヲ其中ニ含蓄シ其状恰モ蜂窩ノ状ノ如シ故ニ此名ヲ得ル^{晚近之ニ}粘液組織ノ名ヲ^{今カハ}反テ^{此ニ}

第十章

蜂窩状組織ハ實ニ見レ全身ノ基礎ヲ為ス者ニメ体中各部ノ維持皆此レニ由ラサルナシ

第十一章

其蜂窩状組織ハ人ニ於テハ他ノ乳養動物ニ比

スルニ最モ萎軟柔弱ナリ然レ其疎密強弱ハ
各人各部ノ異ナルニ從テ相同シカラス

第十二章

全身ノ蜂窩状組織ハ皆俱ニ一個ノ張力ヲ以テ
具フ此力ハ死後ニ於テモ仍見ルヲ得ルカユ
ヘニ亦又ヲ死此レ死体活共ニ有スルカ力ニ属ス然レ此力活体ニ於テ
ハ栄養ノ為ニ較著ノ運動ヲ起ス一敢テ死体ニ
於ルカ如キ此ニアラス故ニ又此ヲ生活体ノ收

縮力ト名ク
サシテツケンテカラク

第十三章

蜂窩状組織ハ全身中何レノ部ニ於テモ必ス液
ヲ其中ニ含蓄ス而テ多クハ諸部ニ在テ水様ノ
液ヲ含ミ眼内ニ在テハ硝子液ヲ蓄フ

第十四章

凡ソ蜂窠状組織ハ流体ノ変メ凝体トナル其始
ナル者ニメ其成分ノ結合混和相異ルニ從テ以
テ各々相異ル諸器械ノ基礎トナル即チ皮膚、脈
管、剛骨、軟骨、靱帯、筋、腱、神経、内臓、腺等皆此ヲ基礎
トメ各自ニ適宜ノ組織ヲ得以テ外膜ニ被包セ

ラル

第十五章

凡ソ全身諸器械皆各自ニ運動ヲ以テ生活ヲ為ス其原一個ノカヨリ生ズ其力之ヲ生活力ト云

第十六章

夫レ生活力ハ是レ普通ノ自然力ト全ク異ル一
種ノ力ナル乎或ハ其原ヲ以テ自然力ニ資リ機生
質即チ機生体ヲ合ノ混合形成ノ状ニ由テ変メ
一種ノカトナリ発スル者乎或ハ一種ノ生活力
原基ナル者アル乎其原基ハ是レ酸質乎神藏乎

神経乎未タ定説説アルナシ

註 予カ生活力略説アリ今記メ爰ニ贅ス○夫

其レ生活基原ナル者ハ是レ体質固有ノ混合ト
其混合ニ由テ以テ発スル処ノ機ニ関係スル
者ニメ須臾モ其中ニ離ルヘカラサル者ナリ
故ニ生活力ハ是レ其質ノ性ニメ即又機ノ性
其ナリ由テ以テ知ルヘシ諸体生活ノ起因ハ是
レテ動物ニ其精液ニ混合ノ中ニ発スル者ナルナ
シ然ルニ其混合ハ又ハ父母ノ生活ヨリ発ス
ル者ニメ父母ノ生活ハ亦其先祖ヨリ傳來ス

是故ニ生活ノ原ニ游ラ其原ヲ極メント欲スル
者ハ唯々之ヲ造物者ニ皈スルノ外ナシ○且ツ
生活ハ必ス其機ノ度ニ後テ相カハル者ナリ故ニ
其機念々具足スレハ其生活亦念々具足ス喻ヘ
ハ「ホレトベシ」ノ如キハ其機草木ニ比スルニ稍
々具足セルカユヘニ其生活モ亦草木ヨリ具足
セリ人身ハ其機ノ尤モ大ニ具足セル者ナリ故
其生活ノ大ニ具足セルヲ敢テ他物ノ比スヘキ
ニアラス

第十七章

凡ソ生活ノ徴ノ最モ普通ナル者ハ外物ノ触
ニ感應スルノ性ナル者是ナリ此性之ヲ発動性

ト名ク

〔註〕按スルニ此発動性ナル者ハ即チ是觸覚性
ト相合致スル者ニノ實ニ之ヲ忒ルノ外敢テ
別ニ発動性ト為ヘキ者ナシ即チ諸機生体皆
能ク外物ノ接触ヲ感覺シ其接触ノ度ニ應メ
コレニ抵抗スルヲ得ルモ觸覚性ナリ又能
ク其保養ニ適スル物質ヲ資テ以テ自テ生成
化育スルヲ得ルモ觸覚性ナリ 此觸覚性

ナル昔ハ各々機生体実質ノ異ルニ後テ各々相
同シカラス即或ハ常ニ外物ノ接触ヲ唯々其抵
觸スル部分ニノニ感覺スルノ体アリ或ハ其抵
觸物ノ性ト接触セラル、部分ノ性トニ後テ或
ハ唯其一部ニ感覺シ或ハ其感動ヲ全体ニ及ホ
スノ体アリ是故ニ此觸覺性ヲ二種ニ分ケ一ヲ
隱的ノ觸覺性ト云セ一ヲ顯的ノ觸覺性ト云フ
隱的ノ觸覺性ハ諸機生体人ヨリ草木ニ至ル迄
皆一モ此ヲ固有セサル者ナク顯的ノ者ハ唯其
抵觸ヲ知覺スヘキ一個ノ中点ヲ具フルノ機生

体ニノニ固有ノ物トス而メ其中点ト名ル所ノ
者ハ即所謂頭腦ナル者ニメ偶々此レナキ動物
ニ於テハ必ス此レニ代ルノ器械アル者ノナル
ナリ

第十八章

夫レ体中ノ諸液モ亦復機生体ナル者ニメ血液
モ亦生活力ヲ備具スル者歟將タ生活力ハ唯々
凝体ニノニ固有ニメ且ツ十分具足ノ動物「ホル
モン」レ行於テハ唯神經質ノニヨリ發スルモノ
軟

注 今生活力ハ機ヨリ登スルト云フヲ原トシ
 テ考ル寸ハ其液ニ生活力ナキト昭々タリ矣
 然レモ今夫胎児ヲ見ルニ其始メ唯是レ一個ノ
 液ノニ是ニ由テ以テ觀レハ液モ亦生活力ヲ
 有スル者乎憶フニ夫レテールストフ男子ニ
 在テモ女子ニ在テモ唯是一個ノ液ナレハ固
 リ生活力ノアルヘキニ非スト也凡其胃精ト
 女精ト和合ニ由テ直ニ一個ノ機ヲ登スルト
 ハ実ニ海塩ノ酸蒸氣ト礫砂揮發氣ノ互ニ合
 和ノ直ニ結芭体即是レヲ為ス力如キ者ナラ

女精ハ卵巣内
 小腹中ニ在リ

ニ受娠ノ初日ニ於テハ其胎ノ状殆ト唯一個
 ノ粘液ノ如シト也凡既ニ已ニ其機ノ登生セ
 ルト其中ニ較手タル動在ノ見ル、ヲ以テ知
 ルヘシ

第十九章

生活力ノ現象ハ其力ノ登動スル器械ノ異ルト
 其力ヲシテ登動セシムル接觸ノ不同ナルヲ以
 種々一般ナラス

第二十章

凡ソ生活力ノ諸器械ニ登現スルヤ其器械ノ異

ルニ志シラ千状可能各々相差フ者ハ之ヲ然ル
ニ其器械合有スル処ノ実質中ニ交錯セル無機
生質多少アルニ由ル而シテ其機生質ノ交錯念
即チ生活力ヲ具有
少キ者ハ其機動必ス益々敏銳ナル者ナリ○
其器械製造ノ異ルニ志メ相差フ処ノ生活力機
動ニ較著ナル者二種アリ其一ハ纖維ノ能ク外
物ノ接觸ニ志メ直ニ変縮スルカニモ「華尔列兒
人」カ發明スル処ノ觸動性ナリ是レ唯筋纖維ノ
固有ノ力ナルカエニ以テ筋觸動性ト名ク其
一ハ外愈ニ志メ變動シ以思慮分別ヲ神識中ニ

發セシムルノ力ニメ古人ノ謾ニ感覺性ト名ク
シ者ナリ是レ唯神志ニ固有ノ力ナルカエニ
之ヲ神志觸動性ト名ク其他身体各部ニ於ケル
生活力機動此両性ヲ以テ解得シ種キ者多シ秋
等ハ又各部固有ノ生活力現象トセサルイテ渴
ス「蒲律綿拔苦」人名曾テ人身資生ノ生活力機動ヲ
体メ一種ノ形成力トセリ能ク臆斷ヲ免ル、ト
云ヘシ癸氏其蜂巢狀組織固有ノ觸動性及ヒ起
脹力「ツツアズウェル」等ヲ謂ニ取用スルカ如キ
ハ切要ノ要ニ非ス

第二十一章

吾侪經驗ニ由テ以テ考ルニ抵觸ハ莫ニ見レ生
活力機動ノ起因ヲ為ス者ニ又其機動ヲ發起ス
ルノ多少ハ常ニ其抵觸ノ度ノ多少ニ応スル者
ナリ故ニ其抵觸スルニ適宜ナレハ能ク生活力
ヲ機動ヲメ強カラシメ其抵觸スルニ過度ナレ
ハ却テ其力ヲ奪フ又身体各部互ニ相感応スル
処アツテ一部ノ抵觸能ク其部ノ機動ヲ發セシ
ムルノミナラス猶其機動ヲ他部ニ發セシメ或
ハ兩部同時ニ異種ノ抵觸ヲ受テ機動ヲ同時ニ

發スルニナク一部ノ機動十分ニ發スル後ニイ
タツテ始テ他ノ一部ニ之ヲ發スル者アリ此送
ニ感應スルノ性ヲ合致性ト云ヒ又分異性ト云
フ

第二十二章

其抵觸ノ生活体中ニ働クト其体ノ此ニ抗衝ス
ルトヨリメ体中諸種ノ機動能ナル者生ス

第二十三章

古人曾テ此身体機能ヲ分チ四種トセリ曰ク動
物性機能神識ノ感覺肢体ノ拳動是ニ屬ス原曰
ク生活機能血液ノ循環其レニ屬ス原名曰ク自

突然能養化育ノ機動是レニ屬ス原名曰ク分種
機能男女媾合ニ関ル機能是レニ屬ス是レナリ
然レ凡今之ヲ考ニ其區別ニ於テモ其名目テ於
テモ共ニ穩当ナラス今時ハ人身ノ諸機能ヲ流
テ唯ニ種ニ分テ一ヲ機生体タラシムルノ機能
ト云ヒ一ヲ動物体タラシムルノ機能ト云

第二十四章

凡ソ体中諸機能皆善ク易ラカニメ間斷ナク成
シモ爾滯スルヲナキ者之ヲ真ノ健康ト名ク

第二十五章

夫レ人ノ体タル地トメ住ムヲ得サルノ處ナ
ク食トメ喰フヲ得サルノ者ナシ此具體能ク
此レニ觸ルノ物ニ忘メ適宜ニソノ機ヲ變ス
ル性ヲ有スルニ由ル其變スルノ時ニ當テヤ十
分健康ノ状ヨリ離レサルニ非スト亟ヒ諸機能
ノ平衡ニ至テハ敢テ差異スルヲナシ是故ニタ
、健康ト名クル者ハ其意味甚廣シ即チ全身諸
器ノ機能々々互ニ合致メ適不及ナキ者ハ皆此
名ヲ取ルヲ得ル唯々諸機能平衡ノ齟齬スル
者ノミ之ヲ疾病ト名ク

第二十六章

是故ニ各人各自ニ相異ナル固有ノ健康アリ其
年齢男女習慣ノ異ルニ従フ者ハ固ヨリ十全ノ
健康ヲ離レサルニ非スト也凡癸亦敢テ疾病ノ
名ヲ命スヘキ者非ス

第二十七章

諸器ノ張力発動性及ヒ諸液ノ性状人々各々
相差フ此ヲ稟質ト名ク古人曾テ此稟質ヲ分テ
四種トス其名当ラスト也凡其別実験ニ出ツ故
ニ今仍之ヲ取用ス即チ其一ヲ多血質ト云フニ

梅毒和病理論曰多
血質ノ人ハ其發動ノ
度高ク力柔弱能値
軟薄シ液後過多
血行迅速ニ阻液
ノ人ハ發動性ノ度高
多ハ強烈能値堅硬
胆液ノ稟質過多ニ粘
質ノ人ハ發動性微ニ
其力弱ク能値弛緩
水液過多ニ星胆液有
人ハ發動性微ニ其力強
ク液体重稟稠密抗衝
力徐緩ニカアリ

ヲ胆液質ト云具三ヲ粘液質ト云其四ヲ星胆液
質ト云フ又抵觸ニ於ル受性及以ニ応スル抗衝
性人々相差フ者此ヲ稟性ト名ク
注四質ハ唯是稟質大概ノ區別ナルノミ實ニ
純粹ノ多血質及ヒ純粹ノ胆液質ト名クヘキ
者ハ敢テ此アルナシ若シ精詳ニ區別セン
トスル寸ハ其差別無数不宛ナラサルナラ得ス

論使人身為動物体之機能第一

第二十八章

リ此諸骨胎児ノ始ニ在テハ皆軟骨状ノ膜ニ又
後チ漸ク硬固トナリ已ニ産出スルノ時ニ至テ
ハ殆ト皆硬骨トナリ其残ル処唯僅力ニ存ス之
ヲ顛會ト云其諸骨ノ迭ニ合着スルヤ最密ニ又
次シモ動搖スヘカラヌ多クハ縫合状ニ相接着
シ其骨質各部ニ許多ノ孔アツテ神圣血脉以ニ
通ス

第三十二章 骨

頭蓋骨内面ハ剛性膜ヲ以テ被ハル此膜ハ強剛
ニ又血脉布蔓セルニ襲ノ膜ニ成ル其外膜ハ血

脈ト峰稟状頂トニ由テ周ク頭蓋骨内面ニ接着
シ其内膜ハ處々ニ於テ外膜ト相離レ延テ以テ
鎌状挺ト後脳前ノ空隙^{ハツク}脳間ノ諸竇^{ブリス}トヲ形成ス
此後^{或ハ}後脳膜内ニ在テ脳ヲ蓋フ所ノ膜ハ此ヲ蜘蛛^{或ハ}絲^{或ハ}樣膜ト名ク此膜ハ固ヨリ敏ク脳ヲ被包ス
ト虫氏^ト腦ノ皺襞間ニ入ル^トナク其質神圣ナク
亦血脈ヲシ 其腦ニ最モ密通^通ト外面ノ凹凸ニ
從^トセ所トメ被ハサル^トナキノ膜ハ此ヲ軟腦膜
トナフ^トケ或ハ脈絡膜ト名ク^{按ニ薄}其質^{或ハ}軟弱
多ノ血脈布蔓シ以テ血ヲ腦ニ送輸セシムル^ト

ヲ為ス

第三十三章

腦ニ二個ノ別アリ一ヲ大腦ト云セニヲ小腦云
フ此兩腦共ニ二種ノ實質ヨリ成ル曰ク灰白質
曰ク白質是レナリ又其大腦ノ後部ト小腦トニ
於テハ其兩質ノ間ニ黄色様ノ實質アリ凡ソ此
大體ニ在テハ勝脈様体ヲ以テ之ヲ繫持シ小腦
ニ在テハ其中部ニ由テ自ラ合着セリ大腦ト小
腦トノ間ニハ「テ」ト名クル者アツテ之
ヲ隔テ其兩間ノ表面ニハ種々ノ皺襞アリテ凹

按テ許多ノ部分ハ
即チ神經根神聖
植小松キリル底葉
ホナリ尚解解合
可參攷

凸ヲナシ内部ノ空隙間ニハ健康体ニ在テハ水
様ノ蒸氣充盈シ其中ニ許多ノ部分整列ス其部
分ノ主用ハ古来未夕之ヲ詳ニスル者ナシ

第三十四章

腦ノ下面大體ノ後部小體ノ前部其兩腦ノ白髓
質迄ニ相接スル處ノ所ニ輸様隆起ナル者ト脊
推ノ始原トアリ以脊髓ノ始原之ヲ延髓ト名ク

第三十五章

諸動物中ニ於テ人ハ其腦神聖ノ大サニ比スルニ
腦ノ下面大體ノ後部小體ノ前部其兩腦ノ白髓
最モ大ニヌ且ツ其大體ノ小體ヨリ大ナルト他

ノ動物ニ比スルニ尤モ甚シ

第三十六章 第廿三上

腦ハ頸動脈ト脊推動脈トヨリ全身血液ノ十分

一許ヲ受テ其還流ノ血ハ諸竇即チ是腦中ノ

由テ内部ノ頸靜脈ト小枝ノ脊推靜脈トニ皈ル

○又腦中ニ於テモ許多ノ吸尿管或者曰ク凡ソ

リノミ云フ者ハ即チ水脈ナアルヲ見ル

第三十七章 全下

腦ニ二種ノ運動アリ其一ハ動脈ノ搏動ヨリ發

スル者ニメ其動微ク其一ハ呼吸ニ関係スル者

ニメ著ク上下ニ動搖ス「按ニ「下」ノ

ハ下

第三十八章

脊推ハ延髓ノ延長セル者ニメ後頭骨ノ大孔ヨ

リ出テ脊骨内ノ空間ニ充填シ其頂白髓質ト灰

白質トヨリ成リ此髓ニ在テハ灰白質内部ニ在

テ白髓質外部ニ位置シ其外面ニハ腦ノ諸膜ニ

等キ膜ヲ以テ被包シ其实体腰部ノ第一二髓間

ニ終リ此部ヨリ下ハ唯神聖ノ會束セル者ニメ

馬尾狀ヲナス

第三十九章

神圣ハ腦ト脊推トヨリ出ル者ニノ白色柔軟ノ
線條ナリ凡ソ体中單質ノ蜂窠状組織按ニ是神
交錯セサ表被軟骨々々膜骨髓韌軟帶剛腦膜蜘蛛
ル者ヲ云蛛系様膜胸膜ノ通膜吸收管胞衣等ヲ除クノ外
ハ諸部皆之ヲ以テ具ヘサルナシ然レモ其枝數
ノ多少ト大小トニ至テハ各部異ルニ從テ曰テ
シカラス

第四十章

神圣ノ腦ト脊推トヨリ出ルヤ兩々相對シ其始

ノ白髓質ノ微細ナル線條許多相聚テ會末シ以
テ神圣大幹ヲ作り其外圍ニ軟腦膜ヨリ展延セ
ル莢膜ヲ被リ其頭蓋骨下面及ヒ脊骨推間ノ孔
ヨリ出ル処ニ於テハ剛腦膜ノ展延セル者ヨリ
其莢膜ヲ得ルク神圣ノ彈力尤多○凡ソ神圣ノ原
始ト末端ト古来種々ノ異論アリト魚氏實ニ如
何ノ状ヲ為ス乎未夕確乎タル證候ナシ

第四十一章

第卅六、第卅七、合解

神經ノ表面ニハスヒラールスウーセノ横紋有
テ血絡布蔓ス其血脉ノ蔓延スルヤ柔脆ノ網状

トテニ白ク神系表面ニ
ハ許多の線條あり其條
理横に其收管ニホテ
ルカトシ

ヲナシテ其末梢皆神圣ノ実質ヲナセル線條間ニ終ル

第四十二章

凡ソ神圣ノ蔓延スルヤ幹ヨリ分レテ枝トナリ枝又夕分レテ朶トナルト恰モ草木ノ状ノ如シ然ルニ其岐分スルヤ實ニ真ノ枝ヲ為スニ非ス又其幹ハ唯々枝ノ會束ノ蜂窠状組織ニ由テ互ニ相結着サルル者ナシ

第四十三章

神圣ノ循行スルヤ身体各部ニ於テ數條相聚合

再按之

下ニシテ自神聖叢神
至外部ニテ根相聚結
足者トテ神聖節其祖
微微密ニ帯任反自其
用詳ニテ安否始ニ神
至叢神ニテ其用ヲ
云々ニテ神聖叢神論
ヲ撰クニテ是ニ物言
トセリ

メ結着シ以テ神圣叢ヲ形成ス 神経節ハ古来或ハ之ヲ各部ニ於ケル小腦ナリトシ其用不隨意ノ諸器ニ具ル神圣トメ神識ニ係ラサラシムルトテ生スル者ニトスト虫凡憶フニ然ラス何トナレハ意識ニ後フ諸筋モ神圣節ヨリ出ル神圣ヲ具ル者アレハ之或ハ又見レ諸種ノ神圣ヲ合体メ一種ノ用ヲ為サシムルトテ主ル者ナリト云フノ説アリト虫凡是唯諸種ノ神圣ヨリ成ル者ニノミ云フヘクメ草種ノ神圣節ニ於テハ云フヘカラス是レ草種ノ神経節ハ唯一個ノ神

全ヨリ成ル者ナレハ

第四十四章

夫レ体ト神識トノ合和ハ固ヨリ神圣質ノ在ル
ニ由ルヲ論ナシ其以レニ由ルヤ神識能ク諸筋
ニ攀動ヲ登セシムルノミナラス猶外感ニ由テ
神圣中ニ登スル処ノ變動ヲ知覺スルヲ得ル

第四十五章

凡ソ人ノ思慮分別ヲナスヤ其力即神將ニ器械
ノ機カヨリ資始スル者乎或ハ別ニ一個神識ナ
ル者アツテ唯生活ノ間其器械ト結合セル者乎

未タ人身生理ノ學ヲ以テ判断スルヲ得ス

第四十六章

吾儕今腦ヲ以テ此ヲ神圣質中ノ中点トシ此ヲ
外來諸感ノ會湊スル所トシ神識諸動ノ發出スル
所トシ以テ之ヲ統具具名名トシ

第四十七章

腦中ニ於テ神識ノ舍スル処ハ舌末或ハ之ヲ肝
腺体ニ中トシ或ハ粘液腺ナリトシ或ハ小腦ナリ
トシ或ハシゲイテワント也トシ或ハ輸様隆起
也トシ或ハ死後ニ腦ノ空隙間ニ於テ見ル所ノ

流動物ト云ト虫氏未ク確乎タル明説ノ証スヘ
キナシ

第四章

識覚ト舉動トハ共ニ固ヨリ神圣質ヨリ發スル
力故ニ亦識覚スル毎ニ神圣質ノ抗衡ニ由テ適
互相互ニスルノ運動ナル者起ル神圣ノ分異性
ハ即チ此レニ由ル者ナリ

第四十九章

神經ノ機動ハ或ハ之ヲ其質ノ顫動ニ由ルトシ
或ハ其質ノ牽縮ニ由ルトシ或ハ腦中ニ分離サ

レテ其質中ニ充盈セル液ニ由ルトス近世^{ヒュム}
ホルト及ヒリ^テル^ス共ニカ^ガル^ハニ^ノ試験ニ
由テ發明スル處ノ新論ニ由ルニ其液ニ在ル^ト
凝ナキニ似タリ

第五十章

夫レ識覚ト舉動トハ共ニ是レ神圣ノ機用タリ
ト虫氏疾病ニ由テハ偶々一個ノ機用識覚若ハ
舉動ヲ失フ^トアルモ仍他ノ機用^ト舉動若ハ識覚
ニ變ラ生セサル^トアル力故ニ或ハ識覚ハ神經
ノ体質ヨリ生シ^テ舉動ハ其莖膜ヨリ生スト云フ

両説共ニ拠アルニアラス

夫レ神経ノ莖膜ハ本見脳膜ノ展延スル者

ナレハ其質固ヨリ強硬何ソ能ク意識ノ感動

ヲ全身各部ニ達セシムル力如キ迅速精微

ノ機用ヲ為スヲ得ニ唯其用脳ト神圣トノ

防禦ヲ為スニ足ルヲモ 憶フニ意識ノ感動

ヲ全身各部ニ達セシムルハ是レ其髓質ノ

顫動若クハ挛縮ノ勢ヒニ出ル者ナシ

第五十一章

神経ノ筋ニ運動ヲ發セシムルノ力ハ唯脳ニ関

係スルノミナラス尚其神圣ニ絡ヘル血管ノ夥

多ナルニ由ル故ニ其体質製造ノ十分具足セサ

ル生類ニ於テハ其力愈々強クメ入ハ其力尤モ

弱シ

夫レ腦ノ扶助ナク筋ニ運動ヲ發起

スルノ神圣力ハ即チ是レ不隨意ノ運動ヲ為

ス者ニシテ實ニ隨意ノ運動ハ腦ノ扶助アルニ

非レハ發スルヲ能ワサル者ナリ

第二回 論外識

第五十二章

原第百五十八

神圣觸動性ハ体中部分ノ種々相異ルニ隨テ種々異同アリ其種々ニ見ワル、者此ヲ外識ト云其外識ニ関ル各個ノ器具ハ能ク神圣ヲノ各個ノ知覺ヲ為サシムルヲ得ルノミナラス能ク動物ヲメ他万物ト殊ナル所以ノ性眞ヲ得セシムルヲ得ル故ニ外識ハ唯々五神ニ止ルトセ

第五十三章

其外識ノ最モ普通ニメ全身ニ滲滿セル者ハ知

覺ナリ知覺固ヨリ神圣ノ能ク外物ニ感応メ變ヲ其中ニ起シ以テ神識ニ外物ノ性狀ヲ告達スルノ機動タリト云凡諸神圣ノ觸動性皆能ク突ル下ヲ得ル者ニ非ス唯皮能ク其神圣ヲメ其機動ヲ發セシムルヲ得ル故ニ知覺ノ器械ハ皮ナリ而メ其指頭ニ於ルモノハ殊ニ優レリ

注夫レ知覺ハ廣ク全身ニ布蕩メ及ハサル所ナキカ故ニ身体保護ノ用ニ於ケル諸外識中ニ於テ最モ卓絶セルモノニメ莫ニ見レ諸般外識ノ原基タル者ニ何ゾヤ夫レ眼耳鼻舌各

々其發動性ニ於ケルヤ相違フト虫ニ視聽嗅
味ヲ為スニ至テハ原ト唯是一個ノ知覺ナル
者ニメ其器械製造ノ各自ニ相違フヨリメ其
現ワル、處ノ用ノ互ニ相異ルノミナレハ之

第五十四章

皮ハ身體ノ全表ヲ被覆セル者ニメ其質三襲ヨ
リ成ル其一ヲ表被ト云ヒ其二ヲ「マルゼキア」
ンセ粘液体ト云ヒ其三ヲ「障ト云フ一名神全皮

第五十五章

表被ハ身體ノ最外表ニ在テ大氣ニ暴触シ其質

薄ク稍透明ニメ血絡神全共ニ此レアルナク

其内面無^キ線條^ノアツテ「マルゼキア」ンセ

粘液体ト共ニ鞏ニ固着セリ此モノハ胎兒ニ於テ

之ヲ見ルニ既ニ産後三月ノ時ヨリ形成スル者

ニメ且ツ動物植物共ニ此ヲ有セサル者ナシ其

用タル殊ニ其下ニ有ル處ノ鞏ニ保護ヲ與フル

ニ在リ

注憶フニ表被ハ殆ト是レ機生体ノ中ニ列シ

難キ者ニ何ソヤ此物タル血絡ナク神全ナク

唯是レ「マルゼキア」ンセ粘液体ノ吸收管ニ由

テ乾固セラレタル者ヨリ他ナケレハナリ

第五十六章

マルビキアーンセ粘液ハ一ニ之ヲマルビキウ
スノ網膜ト名ケ其質半ハ流体ニ属スル者ニ
甚夕水ニ溶解シ易ク表被ノ裡面ト革ノ表面ト
ノ間ニ位置ス

註

憶フニ此粘液モ亦表被ト同ク**概**生体ニ属

シ難キ者ニ唯是レ革ヨリ分泌セラレ、者

其ナリ

第五十七章

此粘液ハ即チ是レ皮膚ノ色ノ在ル処ニ夫レ革
ハ人々共ニ一様ナル者ニメ皆其色白シ表被ノ
色ハ稍此粘液ニ近通ス以テ知ルヘシ皮膚ノ色
ハ即チ此粘液ノ為ス所ナルヲ憶フニ皮膚
ノ色ノ種々ナル其遠因ハ氣候ノ寒暖ト年齢ノ
老弱ト授生ト稟賦ト疾病トニ在ル者ニメ其近
因ハ「ブルメンバツク」ノ説ニ從フニ一ニ論ヘハ皮
膚曇色ノ人ノ如キハ其皮膚ヨリ分泌サレタル
炭質ト水質トアトモスヘリセリフトニ押壓サ
レテ「マルヒキアーンセ」粘液ト結合スルニ在ルモ

ノナラン

第五十八章

臆フニ此「マルヒキア」ニセ粘液ハ革中一種ノ
器械有テ以テ此ヲ分泌スル者乎又臆ニ表被ハ
唯此粘液ノ緻密ニ固凝セル者乎

第五十九章

革ハ鞣強ノ膜ニシテ其質緻密ナル蜂窠状組織ヨ
リ成リ原薄一様ナラス内部ハ鬆疎ニシテ海線様
ヲナシ以テ脂膜ニ於ル其質中血脉ノ錯綜スル
ト甚タ多ク其動脈末梢ハ表面ニ於テ汗管ト

ナリ又奥敷ノ吸水管アツテ其管口表面ニ列布
シ又夥多ノ小腺アツテ皮脂ヲ分泌ス皮脂ハ油
様ノ液ニシテ適ク皮膚ヲ滋潤ス革質ニ滲満セル
神経ハ尤モ夥多ニシテ其末梢ハ身体彼是ノ部分
ニ於テ甚タ著明ニ血脉ト相結合シ以テ微少ノ
乳頭状ヲ形成ス

第六十章

凡ソ人身ノ外皮ハ眼瞼手掌足蹠ヲ除クノ外適
ク毛髮ノ生セルト莫ニ他ノ獸類ニ異ルトナシ
毛髮ハ纖細柔軟ナリト虫尾其性鞣強容易ニ

切斷シ難ク其質血管神全共ニ有ルヲナクイゲ
オエレキテリス之 按ニイゲオエレキテルノ体
テルヲ含ムヲ以テエレキテ ハ其質中自ラ十分ノエレキ
ルノ導ヲ為サル者ナリ 其長短強弱伸縮ノ
度色ノ濃淡生状ノ正斜ニ於テハ唯各人各自ニ
違フノミナラス尚各部各々相等シカラズ其根
ハ皮ノ峰葉状質中ニ在ル微細ノ小球ヨリ生シ
細キ管ヲ以テ圍繞セラル其管マルセキア一セ
粘液ヲ貫テ微ク外表ニ凸出シ表被ニ被包セラ
ル而、其管中ニハ一種ノ液ヲ含ミ外面ニ油様ノ
液ヲ具フルノ毛髮ノ用ハ外触ノ防護ト形容ノ

美飾トヲ成スヲ主ル者ナリ
①注 凡身体ヲメエレキテル氣ヲ得ルヲ過度ナ
ラサラシムル者ハ即チ毛髮ノ為ス処ナリ

第六十一章

皮ハ其質中神全及ヒ其乳頭状ノ最モ夥多ナル
力故ニ固リ知覺ヲ以テ其機用トスルヲ論ナシ
ト至ヒ其機用ノ尤モ鋭敏ナル処ハ掌ニ手掌
ニ於テモ殊ニ指頭ヲ勝リトス是レ掌及ヒ指頭
ハ其皮腠理攸尤モ多クメ神全乳頭殊ニ夥多ナ
レハ又其指頭ノ背ニハ爪甲有テ以テ摸捉ニ

便ス瓜ハ其廣角状ニメ表皮下甚夕相近似ニ唯
表皮ニ比スレハ坚硬ナルノミ

第六十二章

九ノ知覺ノ用ハ入ヲメ能ク物体ノ寒温軟硬輕
重固形流動乾濕滑糙形状及ヒ距離等ヲ弁知セ
シムルニ在リ

第六十三章

舌ハ味識ノ器具ニメ其体肉状其根口内ノ後部
ニツキ其前部即舌ハ舌下軟帶ヲ以テ下顎ニ繫
リ夥多ノ神圣乳頭状ト細小ノ粘液腺ヲ布滿セ

ル膜ヲ蒙リ其肉状ノ実体ハ許多ノ筋ヨリ成リ
以テ著大ノ運轉ヲ為ス下ヲ得ル其神圣乳頭状
ハ三ノ筋五ノ神圣筋三枝ノ舌ニ循ル者ノ末端
ヨリ成ル其他ノ舌ニ循レル神圣ハ筋九ノ神經
ト筋八ノ神圣ノ一枝トニメ皆其実体ノ筋ニ循
ルヲ以テ較著ノ運轉ヲ成サシムルヲ主ル

注味識ト知覺識トハ甚夕能ク相合致スル者

ニメ唯其器具製造ノ違フ処ハ舌ニ於ケル神
聖膜皮ニ在テハ即華ニ在テ粘液樣体表皮ハ共全身ニ在ル
者ヨリ柔軟弛緩ニメ薄ク神圣血管相絡フ下

殊ニ多ク不断津唾ト粘液トヲ以テ滋润セルノ
ミ其粘液ハ舌腹中ニ憶フニ第八对及ヒ第九
对ノ神圣何リ能ク全ク味識ニ関ラサルトア
ラシ巴ニ舌下於テハ其神圣一二ノ技梢ノ乳
頭状ヲ形成セルト著明ナリ

第六十四章

舌膜ハ其神圣乳頭状ノ在ルアルニ由ル能ク有
味の体即チ感覺スル固有ノ受性ヲ有ス亦能ク
ヲ得ル故或ハ特リ之ヲ衝動シ或ハ他若シ之
ヲ衝動攪擾スルトアル寸ハ乳頭状内一種ノ変
化ヲ起登シテ以テ味感覺ヲ生ス此變化ハ塩分子

フヤンバニ舌下於テハ其神圣一二ノ技梢ノ乳頭状ヲ形成セルト著明ナリ

是形ノ種々ナルニ由テ審動ニ登起ヒラル
ト云フ説アリト余原本当リナシ信拠スルニ足ラス
憶フニ味ノ感受ハカニスセ氣化ニシテ者ナ
ルニシテ亦其外面ニ分泌スル処ノ粘液ハ能ク
有味の体ノ作用ヲ適宜ナラシムルト主ル者
ナリ

第六十五章

舌ノ外面口内ノ諸膜モ亦能ク微ニ味セノ感覺
ヲ成ストヲ得ルモノ也

第六十六章

凡ソ一種ノ味セノ佳悪ハ各人共ニ大抵一樣ニ
感覺スト余比亦各人固有ノ神圣質ト殊ニ舌質
ノ發動性ト其習慣ト想像ノ各身不同ナルカ為
ニ其味ニ托ケル微細ノ分別ニ至テハ甚夕定リ
シ難シ

第六十七章

味穢ノ主用ハ唯々飲食ノ佳悪ヲ穢ルカ為ニノ
ミナラス尚能ク其利害ヲ弁スルニ在

第六十八章

鼻ハ齶識ノ器具ニメ口上ニ位置ス其頂骨ト軟
骨トヲ以テ成リ半骨半軟骨ノ鼻条ヲ以テ其中
ヲ隔テ以テ兩個ノ孔ヲ形成ス其兩孔ノ面ニ見
ル、所ヲ前鼻孔ト云其兩孔深ク後部ニ至テ上
頭骨後端ヨリ口内ニ通スル所ノ処ヲ後鼻孔ト
云其孔内裡面ニハ普ク海綿様ノ膜在テ血脉神
全第一对及及七粘液腺甚夕夥多ニ布満ス此ヲ
海膜ト云海液ト云潤液ト云ヨリ分泌サレ以テ
鼻孔内ヲ滋潤緩和シ能ク外傷ヲ防禦ス其海膜
ノ鼻中隔ト海綿様骨ヲ被フノ処ハ第一对神圣

ノ最氏多ク布蕩セル処ニメ即是レ固有ノ嗅識
具タリ又此ニ循ル処ノ第五対神圣枝ハ唯々他
ノ神圣頂下ノ感通ヲ成サシムルヲ主ルノミ
ノ神聖頂下ノ感通ヲ成サシムルヲ主ルノミ
識ニ関ラサルハ何ノ理ソ憶フニ是レ此神圣
ハ其頂稍硬固ニメ汚膜表面ニ布蕩セス空気
ニ暴触セサルカ故ナル一シ第五対神圣ハ甚
タ柔軟ニメ其末稍汚膜ノ鼻中隔及ヒ海綿様
骨ヲ被フ処ノ表面ニ終リテ髓様ノ乳頭状ヲ
形成シ汚液滯ニ其面ニ塗布シ以テ過度ノ抵

觸ヲ防禦ス
第六十九章

此具ニ由テ弁識スル処ノ者ハ即チ諸体固有ノ
香気ナル者ニメ是レ気状ノ揮發ナル燐質ナリ
其之ヲ感覺スルヤ吸息ニ由テ引テ汚膜ニ触レ
シメ以テ其神全ノ内ニ一種ノ機動ヲ發セシム
其機動ノ状ニ至テハ未タ分明ナラサルヲ猶他
ノ神具ニ於ルカ如シ其香気ニ二種ノ別アリ一
ハ敏ク人ヲメ快カラシメ一ハ人ヲメ不快ナラ
シム其快カラシムル者之ヲ薰ト名ケ不快ナラ

薰ト名ケ不快ナラ

シムル者之ヲ嗅ト名ク九テ強烈ノ香氣ハ入ラ
ヌ不快ナラシムル者ナリ

第七十章

偶々歎類ノ嗅臭ヲ弁識スルト入ニ勝ル者アリ
又人ニ在テモ其固トノ殊ナルニ忘メ嗅臭ノ機
用ノ大ナル者アリ是レ其鼻孔裡面ノ大ナルニ
由リ又小兒ニ在テハ嗅臭ノ機用最モ後ニ奪
ル

第七十一章

嗅識ノ主用ハ呼吸スル大氣ノ性ト飲食スル諸
物ノ性トヲ弁別スルニ在リ

〔注〕此識ノ全神全領即胸脊髓諸ニ著大ノ感動

ヲ為ストハ九テ神聖力弛弱ノ疾病論ハハ腕

力卒中眩暈等或ハ神聖力不和ノ疾病論ハハ

搐掣頭痛等ノ症ニ昏亂銳刻ノ品ヲ嗅入ノ偉

効ヲ得ルヲ以テ知ルヘシ

第七十二章 第七十八中

耳ハ聽識ノ器具ニメ頭ノ兩側顙顙ノ石骨部ノ
内ニ位置シ三部ノ別アリ即チ外耳中耳内耳是レ
外耳ハ動搖スヘクメ窪凹凸アル筋薄ノ軟骨ヨ
リ成リ延テ内部ニ入り一個ノ空洞ヲ為ス之ヲ

聽道ト名ク此部ハ軟骨ト骨トヲ以テ成リ外部
ハ三ニテケルカコトキ皮ヲ以テ被ハレ許多ノ
脂腺此ニ布置メ町驛ヲ分泌シ出シ其聽道ノ内
端ニハ一個ノ膜在テ閉張シ以テ外耳ト鼓室中
耳ノ界ヲナス此膜ヲ鼓膜ト名ク

第七十三章 全七

鼓室ハ耳ノ中部ナリ其室中三聽骨互ニ微小ノ
筋ヲ以テ相連接ス三聽骨ハ即錘骨鎚骨是ナ
リ鐙骨ノ根脚ノ部ハ卵丹圓窓内ニ挿マル卵窓
ハ鼓室ニ口ヲ開テ其孔迷路ニ通ス其他此室中

三聽骨
ハナル
アモルト
クニスラ

ニ凹窓一名三 キアセ 軟骨管口ナル者アリ凹
窓ハ薄キ膜ヲ以テ閉張サレ其孔蝸牛殼内ニ達
シ軟骨管ハ其頂骨ト軟骨トヲ以テ成リ鼓
室ノ前部ヨリ口内ニ通シシケ子一デルセ膜ノ
展延セル者ヲ以テ被ハル

第七十四章 全内

迷路即チ内耳前庭按ニ三半規管ノ口前ナ 三半
規管蝸牛壳ノ三部ヨリ成ル其前庭ニハ渠溝有
テ其渠中ニハ二個ノ膜囊其中ニ水ヲ充盈スル
者位置シ三半規管ハ各一個ノ膜管ノ水ヲ盈ツ

ル者ヲ含ミ其五個ノ口ト前庭ニ並ビ開ク蝸牛
壳ハ其上部ホルトルニ口ヲ開キ下部ハ円窓
ニ於テ其口ヲ鼓膜ニ開ク凡ソ坎迷路ハ全腹中
皆透亮ノ水液ヲ含ム其液ハ此部ニ循行セル動
脈ヨリ發露スル処ノ者ニメ再ビ吸收管ニ吸收
シ去ラル

第七十五章 全

固有ノ聽神圣ハ石骨ノ後面ニ於ケル溝渠中ノ
二孔ヨリ内耳ニ入り分テホルタルト三半規
管ト蝸牛壳トノ内ニ布蔓シ顔面神圣ハ石骨ノ

溝渠ニ入テ内耳ヲ通貫シ鼓室内ニ至リ其部ノ
小神圣纖維ト聽骨筋ニ少シ纖維ヲ分共シ其餘
枝ハ皆顔面ニ循行ス

注聽神圣ハ諸神圣中ノ尤モ柔軟ナル者ニメ
其狀糊ノ如聽機ヲ主ル諸部ニ布蔓スル者ナ
リ

第七十六章

聽神圣ノ迷路内ニ布蔓セル者ハ皆音響ニ感応
スヘキ一種固有ノ感動性ヲ有ス夫レ音響ハ彈
力体中微分子ノ顫動ヨリ發スル者ニメ其耳内

格章鳴如八即真
質中二箇ハ脈動ヨリ
起ル者ヲ其音ヲ無
直融者トス

ニ感スルヤ媒ニ由テ触ル、者アリ媒ナク直ニ
触ル、者アリ其媒ヲ為ス者ハ即大氣ニメ其氣
中微分子ノ顫動ヨリ聽神圣固有ノ動ヲ起サシ
ム

第七十七章

外耳ハ輿^多殼未スル響線ヲ受ケ自個彈力ト諸
筋ノ力ニ由テ以テ聽道ニ轄入シ鼓膜ニ達セシ
ムルヲ主ル聽道ノ打撃ハヤ、音響ノ度ヲ節
シ微虫ノ入ルヲ防クヲ主ル鼓膜ハ顫動ヲ
受ケ^之ヲ鼓室内ノ氣ニ共ヘテ直ニ内窓ヨリ迷

路内ノ水液ニ共フルト一ニハ之ヲ聽骨ト^{細筋}
鼓ク響度ニ^心縮卵内窓トニ由テ迷路内ノ水
液ニ共フルヲ主ル以液能ク以動ヲ聽神圣ニ傳
ヘテ以テ其神全中ニ一種ノ機動ヲ起メ神識ニ
音響ノ感覺ヲ為サシム又其鼓室内ニ封闭セル
所ノ氣ト改氣管ニ由テ能ク新陳代謝ス若
シ以氣ナキ者ハ鼓膜能ク外氣ノ壓迫ニ堪ユル
ヲ能ワサルヘシ或^云以改氣管ハ氣ヲ交代セ
シムルノ外尚響線ヲ口内ヨリ鼓室内ニ導キ入
ルヲ主ルト或云響線ノ過度ヲ導キ去ルヲ

主ルト両説共ニ未タ穩当ナリトシ難シ

〔注〕此鼓膜ニハ尚別ニ一二ノ筋纖維有テ能ク
張縮シ至微ノ音響ヲ神識ニ告ルヲ得ル

第七十八章

音響ニ快ト不快ノ別アリ是レ或ハ其響ノ高下
ニ由リ或ハ其斷續ノ長短ニ由リ或ハ數品ノ同
時ニ發スル寸聽ク一ノ易難ニ由リ或ハ音響ニ
由テ發スル処ノ意中ノ思想ニ由ル者ニメ亦各
人ノ稟賦ト常習トニ關係ス是故ニ一種ノ音響
ハ常ニ一人ニハ同種ノ感覺ヲ為スト虫凡各人

ニハ亦各自ノ感覺ヲナスモノナリ

第七十九章

聽識具ノ主用ハ甚タ大ナリトス即是唯人ニメ
能ク快美ノ感覺ヲ為サシム且ツ種々ノ音響ヲ
弁別セシムルノミナラス尚日常ノ交語皆是レ
カ為ニノミ為スヲ得ル

第八十章 第八十章上

眼目ハ視識ノ具ニメ但ニ顔面ノ半部額下ノ眼
窩内ニ位置シ其前面開テ眼瞼爰ニ覆ハル眼瞼
ハ上下共ニ其縁ニ軟骨有テ睫毛以ニ連生シ固

有ノ筋有テ能ク開闔ノ動ヲナシ其内面ニ許多
ノ小脂腺并列ス此ヲ迷答木腺ト名ク此腺ハ油
様ノ液ヲ分泌シ以テ眼脣ノ内面ヲ滑沢ニスル
トヲ主ル又坎内面ノ膜ハ延テ眼球ヲ囲包ス之
ヲ結膜ト名ク眉毛ハ上脣上ニ位置ノ前頭ヨ
リ流下スル汗ノ眼ニ入ル者ヲ拒防シ且ツ傍ラ
過度ノ光線ヲ遮ルトヲ主ル且内眥内ニハ結膜
重襲ノ半月様ノ皺襞ヲ成シ坎ニ次シノ隆起ス
ルモノアリ坎ヲ淚堆ト名ク其主用ハ迷答木脂
ト相類似ス淚ハ鹹味ノ水様液ニテ眼ノ前部

淚腺眼窩前部

ヲ滋潤シ能ク汚物ヲ滌除スルトヲ主ル者ナリ
坎レ多クハ淚腺ヨリ分泌サレ亦テ微ク結膜ニ
於ケル動脈梢ヨリ糞管シ内眥ノ淚泉ヨリ淚管
中ニ吸込サレ淚囊ニ入テ鼻孔内ニ流出ス若シ
淚ノ分泌過多ニテ吸收ノ度ニ過クル寸ハ剩餘
ノ溢液下脣ヨリ頬ニ流下ス啼泣ニ於ケル力如
キ是ナリ

節八十章

眼球ハ諸種ノ膜ヨリ成テ其内諸種ノ液ヲ含ム
其膜ノ最外圍ニ在テ後部ノ多分ヲ被包スル者

按白膜色書之所謂
剛膜ナリ

透明角膜之ニ接着ス白膜ノ内面ニ密接スル処
ノ膜ハ之ヲ脈絡膜ト云此膜ハ内面ニ褐色ノ粘
液ヲ塗布シ前部ニ於テハ白膜ト剥離シテ角膜
ニ密近セズ即チ白膜ノ前端内面ニ在ル所ノ白
色輪按モヨリ内部ニ離レ向テ硝子液前面ヲ
被ヒ許多ノ皺襞ヲ為ス以テ毛様鞏帯ト云此毛
様鞏帯ト角膜トノ間ニ脈絡膜多ク一膜アリ之
ヲ虹彩ト名ク此膜ノ前面ハ其色各人各自ニ相
コトニノ其裡面ハ脈絡膜裡面ニ於ケルカ如ク

黒色ノ粘液ヲ塗布ス此部之ヲ葡萄膜ト名ク而
ノ其中心ニ一孔ヲ穿ツ之ヲ瞳孔ト云但シ未生
ノ兎ニ在テハ其孔第七月ニ至ルマテハ薄脆ノ
膜ヲ以テ之ヲ閉鎖ス脈絡膜裡面ニ在ル処ノ膜
ハ之ヲ神聖膜ト名ク亦網膜ト云フ即チ是視神
聖ト白膜ト脈絡膜ト**鞏**膜ト展延セル者ニ許多ノ
脈絡布襞ス蓋以テ此膜ノ網状ハ此脈絡ヨリ成ル
又此膜ノ中心眼軸按ニ角膜ノ中心ヨリ瞳孔ヲ貫テ正直ニ達スルノ
全在テ眼軸ト云フ当ル所ノ処ハ黄色ニマ甚タ柔脆ナル
小皺襞アリ

第八十二章 全下

此諸膜内ニ充盈セル所ノ液ハ三種アリ其一ヲ
硝子様体ト云ヒ其二ヲ水晶体ト云ヒ其三ヲ水
様液ト云フ硝子様体ハ其值甚ク軟薄ナル峰高
状組織ヨリ成ル者ニテ眼球内後部ノ多分ヲ充
填シ前面ハ毛様軟帶ヲ以テ被ハレ少シノ凹処
アリテ水晶体此ニ位置ス 水晶体ハ亦自己ノ
膜囊ヲ以テ被包セ
ル水様液ハ眼球内ノ前部紅彩ニ由テ前後両空
下ナレル所ノ空隙ヲ充填

第八十三章

神圣膜即網ハ光彩ヲ受クヘキ一種固有ノ受性
ヲ有ス 凡ソ萬物体ヨリ発メ眼ニ入り来ル光
線ハ角膜上面ニ於テハ眼ノ軸ニ循テ屈折シ水
様液内ニ於テハ再少シクヤ、開キ以テ瞳孔内
ニ入り水晶体ニ於テハ復著ク屈折メ益々軸
ニ近途シ硝子様体ニ入ルニ當テハ再ヒ少ク開
キワカレ神圣膜上面ニ合聚シ来テ以テ以ニ外
物ノ影ヲ映写ス因テ其神圣中固有ノ變動ヲ起
シ以テ神識ニ視ルノ感覺ヲ発ス

第八十四章

視神全中ニ一個ノ動脈アリ坎ヲ中心動脈ト名
ク坎脈ノ神全膜ニ入ル来ル所ノ処ハ之旨矣ト
名ク凡ソ坎膜ハ坎矣ヲ除クノ外処トメ外影ヲ
弁識スルノ性ヲ有セサルト無シト云凡其凡
能ク極メテ精微ニ映写スル所ノ処ハ唯眼軸ノ
一矣点ニ在リ是故ニ眼筋即チ六種能ク毎運動ノ
見シト欲スルノ外物ニ其軸ヲ向ハシム

第八十五章

凡ソ外影ノ網膜ニ映スルヤ皆倒写スル燧ニ人能
ク其正影ヲ見ル者ハ是レ神識ニ別ニ一個ノ眼

目在テ坎写影ノ視ニ非スメ其影上下左右皆一
様ニ倒写スルニ由ル

第八十六章

人能兩個ノ眼目ヲ以テ物ヲ見ルニ其單一ナル
トヲ得ル者ハコレ光線ノ感入兩眼共ニ能ク相
合一スルニ由リ尚且ツ憶フニ視神全ノ互ニ相
合着スル処アルニ由ルヘシ

第八十七章

凡ソ眼目能ク適宜ノ光線ヲ受容スル者ハ虹彩
能ク適宜ノ運動ヲ為スニ由ル其運動ハ即チ若

シ光線ノ網膜ニ射来スルヲ強クメ過度ナレハ
瞳孔ヲ縮小シ弱クメ不足ナレハ能ク之開張ス
按スルニ此運動ハ虹彩ノ血管ニ關係スルナル
一シ次者曰以説未タ其理

第百八十八章

脈絡膜裡面ノ異粘液ハ眼内ニ入来ル光線ノ反
暎ヲ拒防スルヲ主ル

第百八十九章

凡ソ眼ノ物ヲ見ルヤ其物ノ距ル遠近必定セル
度ニ忘スルニ非レハ其明亮ヲ尽サス何トナレ

ハ若シ其距離近キニ過クハ光線未タ網膜
ニ至ラスメ早ク合聚スレハナリ然レハ眼目ニ
ハ固有ノ諸筋有テ稍能ク其遠近ノ度ニ適スル
ヲ得ル 然ルニ若シ角膜及ヒ水晶体ノ前面
凸起過度ナル者ハ近視眼トナリ若シ其平坦ニ
過寸ハ遠視眼トナル

第百九十章

凡ソ眼目ノ用ハ唯能ク外物ノ色ヲ分別スルニ
在リト云々然レハ習慣ニ由テ亦能ク其物ノ大小
遠近状動靜等ヲ明ニ決定スルヲ得ル

第九十一章

視識ノ主用ハ能ク離隔セル至遠ノ物ヲ速カニ
弁別スルト諸想像カラ補助スルト能ク人ヲマ
僥倖ヲ得セシムルトニ在リ

第三回 論神識カ

第九十二章 原本第百三

神識ハ外識ニ由テ思慮_ルホリ_ルステ_クヲ得ル者ニ
メ生_カカラ分別_ツベク_リヲ有スル者ニ非ス然レ
凡能ク思考_ウア_{イン}グ_スコ_ラ形成_メホ_ルス_ルハ神識

固有ノ性ナリ 即チ

第九十三章

神識ニ二個ノ別アリ一ヲ知カ_モゲ_ンフル_ト云ヒ
一ヲ意識_ルト云フ

第九十四章

知カハ即チ是レ神識ノ思慮_ヲ得_テ以_テ之_ヲ運
用スルノ受性_ハツト_ハナ_リ其能ク神識ヲメ
外感_ヲ受_テ思慮_ヲ起_サシム_ルニ至ル_ヲ卑_{知カ}
ル_モゲ_ント云ヒ思慮_ヲ起_メ以_テ分別_スル
ヲ高知カ_ルモ_ゲン_ト云_フ思慮ノ未夕不明ニメ

ラ
固證シ難キトベケル、エシソシンデ際ヲ感ルゲヤ
ゲント云其明亮ニマセニ固證スルヲ得テレ
レキ、エシソトベケルニ固證スルヲ得テレ
ウエストセイシトベケルニ固證スルヲ得テレ
分別トアリ両ラ俱ニ思念ヨリ出ツ想像力ハ
即チ目前ニ在テサル事件ヲ思考スルノカニメ
其未タ心意上ニ出サル者ヲ「蘭名」イ
ンクト云ヒ已ニ心意上ニ発スル者ヲ「記憶」イ
ンクト云フ智タルトハ神識ノ事件ヲ分別メ以テ
自ラ事ヲ発スルノカナリ或ハデケンハ
各個ノ事件ヲ一般ノ事件迄ニ考成スルノカナ

リオ「フルニ」ハ一般ノ事件ヲ各個ノ事件ニ配典
シ考フルノカナリ

第九十五章

意識ハ神識ノ能ク善美ナル者ハ之ヲ好欲シ醜
悪ナル者ハ是ヲ忌嫌スルヲ得ルノカナリ其
好欲ノ度ノ最ニ劇甚ニマ義理レノ能ク之ヲ
制伏スルヲ得ヌ由テ以テ終ニ体中不隨意ノ
運動ヲ発スルニ至ル者ハ之ヲ情ハト名ク

公秘理論曰、
心愈慮愈別、
身愈苦愈自然、
忘嫌利、
好欲、
ナラス

内部好欲力
テルベゲール
テ「羅旬名」
インダリフト
ハ人ニ於テハ
他ノ動物ニ於ケルカ
如ク較著

第四回 論舉動力

第九十六章

舉動力ノ器械ハ筋ノ筋ハ柔軟^軟人体ニ在テハ赤
色ニメ稍々弾力ヲ有シ、
纖維ハ峰高状組織ニ
由テ種々ニ相會束シ以テ「
此「
筋ノ全質ヲ為ス

アリテ其端骨ニ固着シ、
血脈吸<sup>心藏ニテツテ、
收管神</sup>
至夥多ニ錯綜シ、
ニ比スルニ甚夕強固ニメ、
彈力強ク血脈神至共
ニ微ヒメ固有ノ融^融動力ナシ、
或ハ云、
高状莖膜ヨリナル者ナリト、
憶フニ亦臆説ナラ
サルニ似タリ

因舉動ノ器械ニ能動ト所動ノ二種アリ、
能動ノ器ハ即チ筋ニメ、
所動ノ器ハ骨ナリ、
筋ノ赤
色ハ全身皆一種ナリト、
金凡是レ、
血脈ニ係ス

ル者ナリ故ニ之ヲ破モ者ハ其色全ク消散ス
筋ノ質ハ極微細小ノ纖維ヨリ成ル者ニメ
其纖維ノ互ニ相合着スルヤ活物膠ニ由ル乎
活物油ニ由ル乎ヲ知ラスト虫氏只合着カハ
大ニ生活力ヲ補助ヲ得ル者ナリ何トナレハ
今死体ノ筋ヲ取テ之ヲ扶裂スルニ甚タ易シ
ト虫氏等カヲ以テ活体ノ筋ニ縞ルニ少シ
ノ変ヲ為サレハニ憶フニ其極細纖維ハ
各々蜂窩状ノ莢ヲ以テ被包サレ蜂窩状組織
ヲ以テ許多相會束合着メビュンデルチースト

ナリ再ニ相會束メ大ビュンデルストナ其ビュン
デルス復タ相聚テ終ニ一個ノ筋ヲ形成ス其
ビュンデルチースト間ニハ脂肪アルトナシト虫
氏大ビュンデルス間ニハ偶此アルヲ見ル其脂
肪筋ノ間ニ於テハ甚タ夥多ニ此ニ固包シ以
テ近傍ノ諸器ト合着スルトヲ防ク全筋
蜂窩状質中ニハ水蒸氣充盈セルカ故ニ筋較
ク柔軟ナルトヲ得也且ツ運動ニ便ナルトヲ
得ル

○微紅可帶其色黃
有病者云黃色下

骨ハ体中ニ於テ尤モ堅剛ナル部分ニシテ諸凝体
ノ柱礎タルヲ主ル者ニシテ其質中磷酸性ノ石
灰土ヲ含ムト他部ニ比スルニ最モ多ク蜂窩状
組織ヲ有スルトハ他部ニ違フトナク血脉吸状
管共ニ其中ニ循リ神圣ハ唯脉管ノ質中ニ在ル
者ノ外面ニ循ル者ナク色ハ白色ニシテ
フ後ハ紅色トナル諸骨ノ形状突起凹陷等ハ皆
人々相定レル者ニシテ齒ヲ除クノ外ハ外固皆骨
膜ヲ被ハサル者ナク内空ニハ骨髓充填ス骨髓
ハ脂肪状ノ流質ニシテ軟ク骨ヲ軟和シ且ツ之ヲ

○微紅色ヲ帶其色黃
有病者云黃色下

大輕カラシムルト主ル

第九十八章 骨

凡百ノ諸骨其始ニ於テハ皆軟骨ナリ軟骨ハ滑
沢ニシテ白色微透明甚ク彈力強ク柔撓スヘシ諸
軟骨多クハ皆漸次ニ変メ骨トナルト云ヒ亦生
涯軟骨ニ止ル者アリ即チ是固有ノ軟骨ナリ
唯頭外耳諸關節軟骨ニ亦骨ニ於ケルカ如ク外
ニ於ル者是ナリ軟骨ニ亦骨ニ於ケルカ如ク外
固ニ膜アリ之軟骨膜ト云以膜其軟骨ノ骨ニ接
着スル所ニ於テハ骨膜ト連ラ一面ノ膜トナル

凡ソ軟骨ノ変ノ骨トナルヤ其始ノ其度中ニ
動脈末梢ヨリ分出スル所ノ骨質分子軟ク凝固
ノ^骨質^軟ナル者ヲ形成ス以骨質漸ク增長ノ終ニ
全骨ヲ成スニ至ル

第九十九章 全上下

凡ソ關節ノ運動ハ其骨端ヲ被フ処ノ關節

軟骨ト關節液トニ由テ輕易ナルヲ得ル

第一百章 筋

諸筋ハ皆一種固有ノ発動性アツテ刺激セラル
一寸ハ直ニ収縮スルノ力ヲ有ス以力ヲ筋力ト
名ケ或ハ肉力ト名ケ或ハ華尔列児ノ融動性ト
名ク其力タル固リ草一ノ彈力ト違ヒ又神圣觸
動性トモ違フ然レ以テノ神圣融動性トハ全ク干
渉セサルモノニアラス

送 筋纖維ノ運動ニ於テハ血液ノ運行亦缺ク

一カヲサルノ用ヲ為ス是故ニ血脉ヲ切斷ス

ル者ハ其筋直ニ運動ヲ過弛スルト猶神圣ヲ
切斷スルカ如シ

筋百一章 筋百

諸筋ノ牽縮スルヤ其質中発スル処ノ変化ノ性
如何乎吾輩未タ之ヲ知ルトヲ得スト虽凡其筋
此時ニ当テ敢テ膨脹スル者ニアラス

注按ニ利害濼度ノ説ニ曰ク筋ノ運動タル

其牽縮ノ暇ニ於テ膨脹セズ却テ其形ヲ減
少スル者ナリト今筋ノ運動ノ性ニ由テ考ル
ニ其説冥ニ當レリトナレハ是レ纖維ノ牽縮

ヲヨリナル者ニメ其纖維ヲ合着セシムル蜂巢
状組織此レカ為ニ壓縮サレ由テ強硬堅固ス
レハナリ

筋百二章 筋百

凡ソ動体中ニ於ケル百般ノ運動多クハ皆筋ノ
牽縮ニカ、ラサル者ナシ諸口筋ノ圍閉サレ諸空間ヲ固繞スル筋由テ譬へハ拮約筋ニ由テ
ハ其空洞能ク狭窄サレ諸管ノ長ニ縮ヒ或ハ之
ヲ輪状ニ固繞スル筋ニ由テハ只管或ハ延長サ
レ或ハ短縮サレ或ハ寛ケラレ或ハ窄メラレ兩
端各異ノ部ニ固着スル筋ニ由テハ其兩部互ニ

動搖サル、等ノ如キ見ナリ此兩部互ニ動搖ス
ル者ニ於テハ其一方動搖シ易キノ部必ス他ノ
一方ニ牽動セラレ、モノナリ

節百三章

諸筋ノ運動スル其力其速共ニ大ナリ固ヨリ此
ヲ補助スル者種々アリトハ虫ト其自ラ有スル
処ノ者亦甚々多シ何トナレハ識筋ノ骨即チ動
骨ニ着クハ多クハ隻起器原名エホンアルノ状
ヲ為ス器械ニ由テ是ヲ見ルニ當ニ力ノ減ス

補助スル者種々アリトハ虫ト其自ラ有スル
処ノ者亦甚々多シ何トナレハ識筋ノ骨
骨ニ着クハ多クハ隻起器
ヲ為ス器械ニ由テ是ヲ見ルニ當ニ力ノ減ス

一キニ發ルニ其力能ク對待セル筋力ニ勝テ數
量ノ重ヲ轉動スルヲ得レハナリ

節百四章

諸筋ヲノ運動ヲ發起セシムルノ刺戟ハ多クハ
其筋ニ触ル、此ノ外物ニ由テ成ル者アリ或ハ
唯神圣ノ其筋中ニ運用スルニ由ル者アリ其運
動能ク神識ノ意ト合一スル者ハ之ヲ隨意運動
ト名ケ否ラサル者ハ之ヲ不隨意運動ト名ケ凡
ク体中諸運動多クハ此兩動ノ間ニ在リ

節百五章

神圣ノ觸動性タル諸器ノ異ルニ忘メ各々相異
ルカ如ク筋ノ觸動性^三諸器ノ異ルニ忘メ各々
相異ナリ

第百六章

第百六章参考

或云蜂窠状組織ニモ亦^ル見列^リ安^セ設^テ觸動性アリト云フト魚^ニ然^ル未^タ較^手タル微^シ澄^ク得^ス

第百七章

諸筋運動ノ身体保護ニ利用ヲ為スヤ媒ナリ直
チニ及ス者アリオシ^ニミ^テル^バト^ル媒^ヲ以^テ及
ス者アリ^ニテ^ルバ^トル

第五回 論睡眠

第百八章

原本第百六

神圣^ノ質^ニメ^テ神^識ニ^テ感^覚ヲ^為サシメ^テ諸^筋ニ^テ隨^意
ノ^運動^ヲ起^サシムルノ^間之^ヲ興^奮ト^スヒ^テ其^感
覚^ト隨^意ノ^運動^ト共^ニ休^止スルノ^間之^ヲ睡^眠
ト^云フ^此兩^機常^ニ互^ニ相^交代^ス

第百九章

睡眠ノ近^因ハ^即唯^テ神^聖質^ノ休^止スル^者ニ^メ其^誘
因^ハ種^々アリ^即勞^働後^ノ虛^脱衰^弱抵^觸ニ^由
テ^發動^性ノ^費耗^スル^者ヲ^ヨビ^テ腦^質固^有ノ^運用^ヲ

ヲ妨クル諸病等是ナリ

〔注〕或人僻説ヲ立テ曰睡眠ハ血液ノ腦ニ送輸
スルコト多キヨリ發スル者ナリト然レモ今
実験ニ由テ之ヲ見ルニ凡ソ血液ヲ腦ニ送輸
スルコト多キ諸病ハ常ニ睡眠ヲ妨クル者ニ
且ツ睡中ハコトニ腦質萎縮スル者ナリ
フニ睡眠ノ近因ハ腦中血液ノ減退ニヨルモ
ノナラン如何トナレハハマ親シク実験スル
ニ脚踏刺絡下利冒寒ノ後及ヒ飲食ノ後等凡
テ血行他部ニ増進スル者皆睡眠ヲ發スレハ

こ發レモ又卒中凡頭蓋骨傷及ヒ頭蓋骨ト腦
トノ間ニ血液ノ溢出スル者等ニ由テ發スル
野睡ハ此ノ比ニアラス

第百十章

睡眠ノ將ニ發セントスルヤ必ス疲倦ノ症ヲ發
スル者ナリ

第百十一章

不隨意ノ諸運動ハ睡中尚保続スト魚氏寤覺ノ
時ニ比スレハ稍ニ寛徐ナリ 睡眠ニ由テ神全

論使人身為機生体之機能節二

節百十三章

原節百三

人身ヲメ機生体タラシムルノ機能ニ為スル者ハ凡ソ能ク身体ヲメ各個ノ諸部ヲ保固セシメ且ツ能ク之ヲメ生々蕃殖ヲ成サシムル者之レナ

節一回論血液循環

節百十四章

原百三

人身中ノ血液ハ赤色温暖ノ液ニメ心藏ト尿管

トノ中ニ含マレ循環流利ノ止ムナク諸液中ノ最大緊要ナル者ニ凡ソ体中諸液未熟ナル者ハ皆此ニ送入サレ分離セル者ハ皆此ヨリ出テ凝体モ之皆之ヲ以テ栄養セラル

節百十五章

血液ハ健康ノ体中ニ於テハ一種ノ純液ノ如シト云ヒ之ヲ体外ニ出ス者ハ自ラ相分析メ其始メ水様ノ蒸氣ヲ發スルノ外三種ノ近成分トナ
ル其一血液他各所謂華氏ノ驗温管百五十度ノ
蒸氣ヲ以テ凝固セシムヘキ者ニ其二纖維質

出セル血液ヲ直クニ凝固スルヲ得セシム
ル所ノモノニ其三紅部^{紅部}其質至微ノ小球ヨリ成
ル此三種ノ者ノ相分拵スルヤ其^{紅部}ノ漸次ニ凝
固ノ血水ト血塊トニ分ル其血塊ヲ取テ散ク之
ヲ洗滌スル寸ハ紅部自ラ滌除サレテ纖維質ヲ
残ス血液ノ遠成分ハ予已ニ第四章ニ於テ略
説セル所ノ者是ナリ矣レ凡唯此紅部ハ体中他
ノ部分ニ比スルニ鉄分子ヲ含ムト最モ許多也
第百十六章
血液ノ紅色ハ固ヨリ紅部固有合和ニ關係スト

血ニ鐵ノ亦血液ノ生氣ニ觸ル、寸鉄分子ノ
酸質ト結合スルニ由テ増進スルナルヘシ

第百十七章

生活体ニ於ケル血液循環ハ心臓ヨリ動脈ニ出
テ動脈ヨリ静脈ニ移リ静脈ヨリ復タ心臓ニ皈
入スル者ナリ矣ルニ往古ハルヘトス^人ノ時ニ
於テハ世人皆以爲ラク血液運行ハ唯静脈ヲ以
テ進退スル者ナリト今其ノ循環ノ状ヲ知ラニ
ト欲セハ亘ク試ニ体ノ一部ヲ縛帶スヘシ動脈
ハ必ス其縛帶ト心臓トノ間膨脹シ静脈ハ縛帶

ト末梢即チ動脈末梢ヨリ起下ノ間脈脹ス以テ
静脈血ノ故流スル者ニノ動脈血ハ輸行スル者
ナルヲ知ルヘシ又他静脈内ニ於ル障膜ノ製
造後脈内ニ注入セル水液ノ行及ヒ血液溢出
常ニ多クハ動脈末梢ヨリ登スル等皆以テ之ヲ
証スルニ足ル

第百十八章 第百八上

心藏ハ血液ノ循環ニ於ケル最要ノ器ニノ胸腔
内ニ位置スル内空尖形ノ筋負ヒ又外圍ハ心囊
ニ被包セラレ外面滑沢ヲ得以テ摩擦愈着ノ

善ルヲ光端ハ下方ニ向テ左側ニ偏ス 其製造ハ
一個ノ心室ト二個ノ附一ノ名心トニ接合スル處
ノ潤スト二個ノ心耳トヨリナル者ニノ内外面
共ニ一種ノ膜ヲ以テ被フ又外面膜ハ即チ心囊
ノ諸脈管ニ接着スル處ヨリ展延シ来ル者ニノ
内面膜ハ諸脈管ノ内面膜ヨリ展延ス 兩個心
室ハ其間肉状ノ中隔有テ以テ相分ル又中隔内
面ハ心室内ニ於ル他ノ内面ト等ク繚乱セル較
著ノ肉條在テ或ハ乳頭ノ状ヲナシ或ハ木根ノ
状ヲナス而メ其兩箇一ハ之ヲ前室即右ト云ヒ

一ハ之ヲ後室即左ト云フ前室ハ其内室稍短ノ
潤リ其肉薄ノ後ハ其肉稍厚シ此両室各二個ノ
口アリ其一ヲ静脈口ト云ヒ一ヲ動脈口ト云一
ヲ肺動脈口ト云ヒ一ヲ肺静脈口ト云フ静脈口
ハ前室ノ静脈ト接スル処ノ処ニメ其縁白色ノ
輸圍繞シ内面膜置室ヲ三尖辨ヲ形成ス動脈口
ハ後室ノ動脈ニ接スル処ニメ其縁輪狀ノ膜有
テ界限ヲナシ三個ノ半月様辨以ニ懸リ其每辨
各ス中部ニ於テ微小ノ粒ヲ具フ肺動脈口ハ前
室ニ開テ殆ト動脈口ト然^其狀ヲ同シ肺静脈口ハ

後室ニ在テ二尖帽子様辨ヲ具フ

④心藏ハ左ノ胸腔内ニ在テ心囊ニ被包セラ

ル心囊ノ用ハ心藏ヲ固持メ動搖過度ナラサ

ラシムルニ在リ故ニ能ク横膈ト結着ス

節百十九章 全下

附室ハ心耳即附室ノ展ヲ共ニ短クメ潤ク其固

薄ク心藏ノ内外面膜ノ重襲ヨリ成リ其膜間ニ

ハ筋纖維ノ網様ナル肉條位置シ其室中隔有テ

兩部即左ニ分ル其中心隔ハ亦心藏内外面膜ノ重襲

セル者ニメ其膜間亦筋纖維アリ未生ノ胎児ニ

在テハ此中隔ニ卵円孔ナル者有テ障膜以此ニ懸リ其障膜ハ生後漸ク其縁ニ愈着シ終ニ唯
癥痕ノミヲ殘ス 兩附室ト各々其接スル処ノ
心室内ニ納ル即ケ前室ニ在テハ静脈大幹ノ血
ヲ受ケ後室ニ在テハ肺靜脈ノ血ヲ受ク 又下
幹靜脈ノ附室ニ接スル処ニハ改氏辨ト名ル障
膜懸リ 心藏ノ実質ヲ栄養セシカ為ニハ固有
ノ血脉ト神圣トアルト猶他ノ諸筋ニ托ケルカ
如シ

〔注〕心藏ニ循行セル神圣ハ其原ヲ蔓延神圣ト

助間対神圣トニ資ル者ニメ其質甚ク柔ク其
數少シ

第百二十章

心藏ヨリ起ル処ノ諸血脉種々アリ皆水ノ枝極
ヲ生スルカ如キ状ヲ以テ全身諸部ニ蔓延ス此
脉ノ種類ハ其中ニ循行スル血液ノ向方ニ從テ
以テ区分ス即チ心藏ヨリ以テ血液ヲ各部ニ輸
スル者ハ之ヲ動脈ト云フ体中各部ヨリ血液ヲ
心藏ニ収流セシムル者ハ之ヲ靜脈ト云フ

第百二十一章 原百八上

動脈ハ膜質ノ管ニメ其原ヲ心藏ニ資リ各部ニ
蔓延シ枝分スル毎ニ漸ク狹窄トナル其質三襲
ノ膜ヨリ成ル其一網有膜見レ身体各部ニ於テ
其部ノ蜂巢状組織ヨリ尚外膜ヲ得ル其二肉膜
其三内面膜是レ此諸膜亦各々其栄養ノ為ニ
自己ノ動脈ヲ具フ

第百二十二章 全下

諸動脈ハ皆必ス其原ヲ動脈大幹ニ取ル者ニメ
其管内静脈ヨリ狹ク其膜ハ稍厚クメ彈力強ク

其岐分スルヤ木ノ枝ヲ生シ極ヲ分ツカ如ク漸
次ニ分レテ微細ノ條綫トナル凡ソ動脈支ハ再
ニ復タ合同スルナキ者ナリト虽凡唯体中一
ニ部分ニ於テハ動脈大枝ノ互ニ相接合スル者
アリ如此ク綫分スル其終端一分ハ静脈ノ微末
梢ニ終リ一分ハ已ニ血液ヲ通セサルノ細管ニ
終ル此細管ハ即テ所謂養氣管栄養管分泌管ナ
ル者是レナリ

第百二十三章

静脈ハ其頂唯固有膜ト内面膜トノ二襲ヨリ成

ル者ニノ筋纖維ハ唯又大幹ノ心藏ニ近途セル
処ニ在ルノミ又他ニ於テ此レアルトヲ見ルト
ナク又内面膜ハ各部ニ於テ較著ノ皺襞ヲナシ
以テ障膜ヲ以成ス 凡ソ此脉ハ動脈ニ比スル
ニ其管内寛ク又莖行枝數定リナク又膜軟ニメ
薄ク彈力少ク又原ヲ動脈ノ至微末梢ヨリ取り
極ヨリ枝トナリ幹トナツテ終ニ兩個ノ静脈大
幹即上幹トナリ以テ血液ヲ以序ニ隨テ心藏ニ
散入セシム

〔注〕凡ソ動脈ハ其莖行常ニ静脈ヨリ深シ故ニ

能ク其外傷ヲ防禦スルトヲ得ル 静脈ノ莖行
スルヤ互ニ相接合スルト各部ニ於テ甚夕多
シ故ニ其岐分ノ木枝状ヲ為スト動脈ノ如ク
相似ス

第百二十四章

心室ト附室トハ常ニ相番替メ縮張ス故ニ静脈
両大幹上幹ノ血ノ前附室右附ニ入リ肺静脈ノ
血ノ後附室左附ニ入ル間ハ兩附室共ニ寛張メ
兩心室共ニ縮窄シ其血ノ後附室ヨリ後心室ニ
入リ前附室ヨリ前心室ニ入ル間ハ兩附室共ニ

縮窄メ兩心室共ニ寬張シ前心室ノ血ノ肺動脈
ニ出テ後心室ハ血ノ動脈大幹ニ出ル間ハ兩室
縮窄シテ兩附室再ニ寬張ス此縮張ノ諸動ニ由
テ以テ靜脈大幹ノ血液前室ニ入テ肺ニ至リ肺
ヨリ後室ニ返テ再ニ動脈大幹ニ出テ以テ全身
ニ普達スルヲ得ル心室内面ノ肉條前出テハ
能ク心室ノ縮張ヲ助テ以テ能ク血液ヲ噴出セ
シノ脈管口ニ懸ル処ノ瓣膜ハ能ク血液出入ノ
度ヲ節シ且ツ只逆流ヲ防クヲ主ル

第百二十五章

心ノ尖端ハ心室ノ縮窄スル毎ニ左胸ノ内面ニ
向フテ其動ヲ外ニ忘セシム即チ心悸動ナル者
是ナリ而シテ其動ハ常ニ動脈ノ搏動ト相合致ス
由テ以テ知ルヘシ心室ト動脈ト只縮張互ニ相
及スル者ナルヲ搏動ハ縮窄ニ由テ外忘ス
ル脈動ハ大抵大人ニ在テハ一分時間七十動
許ナル者ニメ其數小兒ニ在テハ甚タ多ク老人
ニ於テハ大ニ少ク亦体ノ長短稟賦ト強弱各自
ノ作業ホエ由テ其遲速強弱各種ナル者ニ

第二十六章

心室ノ縮窄スル其力ハ甚^甚タ強烈ナル者ニノ殊
ニ後室ハ最^甚モ勝レリ

第百二十七章 第百三十三上

死ニ臨テ心室縮窄メ過絶スルヤ後室必ス前室
ニ先ツ是レ前室ハ仍故流ノ血ニ由テ刺戟セラ
ル、ト稍長ケレハナリ

第百二十八章 全下

今華^ル列^レ兒^リ名^人ノ登明ニ從テ血液ノ刺戟ヲ後室
ニ成サシムル寸ハ敏ク後室ヲ前室ノ死ニ後
ル、トヲ得セシム因テ以テ證スヘシ心室ト附

室ト相番替スル縮張ノ動ハ全ク是レ血液ノ刺
戟ニ起因スル者ナルトヲ

第百二十九章

心藏ノ運動ハ不隨意ノ者ニメ其觸動性ハ猶他
ノ諸筋ニ於ルカ如ク其神圣ニ尊^ニ縮^ニ關係スル
者ニアラス唯神圣觸動ノ刺甚ナル症ニ於テ
ハ此ニ由テ變ヲ生スルトアルノミ

第百三十章

動脈中血液運行ノ勢ハ心藏ノカト動脈固有ノ

縮力トニ關係ス而シテ此固有縮力ハ其固有膜内
面ニ在ル処ノ筋纖維ヨリ發スル者ニ其心藏ノ
力ニ由テハ其脈寬張シ固有ノ縮力ニ由テハ縮
窄ス又縮窄スルヤ常ニ固有ノ寬度ヲ過ク此縮
窄固有ノ寬度ニ復スルノ三ナル寸ハ心藏ト動
唯彈力ニ由ルト云テ可ナルヘシ
脈トハ其縮張互ニ相及スル者ニメ其動脈ノ起
固ハ亦心藏ニ於ケルト同ク按ニ即血液ノ刺亦
夕其動ハ不隨意ニ發レ凡亦神圣廣機動ノ增長
ニ由テハ其動ニ變ヲ生スルナリ

第百三十一章

靜脈中ニ於ケル血液ノ運行ハ甚夕緩徐ニメ其
脈大幹ノ心藏ニ近迄セル部ノ外敢テ搏動アル
ナク其血液ハ唯心藏ノ力ト動脈ノ力ト靜脈
固有ノ彈力ト又脈ノ蔓行セル部ノ近傍ニ於ケ
ル筋ノ縮張ト近傍ニ於ケル動脈ノ搏動トニ由
テ運輸セラル其近傍ニ於ケル者ノ壓迫ニ由ル
力如キハ其力甚夕微ニト血凡管内ニ於ケル障
膜以テ鼓ク其血行ヲメ心藏ニ向フナラ得セシ
メ亦血液ノ重力モ少シク其運行ヲ助ケルナリ
リ又其心藏ニ近キ処ニ於テハ心室ノ吸入スル

力能ク又運ヲ進ムルヲ得ルニ其他以脈ノ枝
数多キト管内ノ寛キト持合ノ処ノ多キト皆能
ク又血ヲ又流利シ易カラシムルニ足ル

第百三十二章

血液循環ノ機能ハ諸機能中ノ最要ナル者ニ血
液能ク此レカ為ニ凝体ヲ栄養シ諸液ノ分利ニ
由テ以テ全体生活力ノ保護ヲ為スヲ得尚且
ツ自ラ能ク妙合ノ流利シ能ク腐敗ヲ免レ能ク
全身ニ普達シ傍ラ次シノ体温ヲ登スルヲ得
ル

第二回 論呼吸

第百三十三章 泉百二十八

呼吸ハ已ニ産出スル人ニ在テハ甚ク能ク血液
循環ト相関スル者ニメ其器ハ即チ肺臓ナリ
肺ハ気管ト相連流メ胸腔ニ位置ス

第百三十四章

胸腔ハ又周圍骨推指助直骨部ト軟胸骨トヲ以
テ柱礎トシ助間筋又助骨ノ間ニ位置シ下底ニ
ハ横膈筋又負ニ腱様部トナル者有テ以テ腹腔ト
界隔シ周圍ノ内面ハ助膜ヲ以テ覆ワル助膜ハ

二個ノ囊状ヲ為ス者ニメ、又兩囊相接スル処ハ、
即縦隔膜ナリ而シテ、又縦隔膜ノ前後ハ相接セサ
ル部有テ以テ少ク空隙ヲ為ス

第百三十五章

此肋膜ノ囊内ニハ、兩個ノ肺藏有テ之ヲ充填シ
水様ノ液氣其間ニ滲出シテ互ニ愈着ヲ為サシ
メス、縦隔膜ヨリ兩肺ノ間ニ向セ肋膜ノ重複
セル者上リ至ル之ヲ肺散帶ト云フ、此散帶再ニ
展リ成ル裂ハ、再ニ與數至微ナル蜂巢状皮ヲ
以テ成リ、又蜂巢状皮ハ、肺動靜脈ノ枝梢纏絡シ

気管ノ至末梢其内ニ口ヲ開ク、肺中又別ニ皮
質ノ深養ヲ主ル処ノ一種ノ血管アリ

⑤肺藏ハ較著ノ裂裂アツテ相分タレ、右肺ハ

三葉トナリ、左肺ハ二葉トナル、而シテ左肺ハ心
藏ノ其部ニ在ルカ故ニ其形大ニ、右肺ヨリ小

第百三十六章 第百三十五章上

気管ハ下肺藏ニ連続シ、上口内ニ出テ孔ヲ成ニ
開ク、其部ヲ喉頭ト云フ、其位置頸ノ前部中央ニ
在リ、喉頭ハ諸種ノ軟骨相圍繞シ、舌腔間ヲ作

ル軟骨一ヲ環状軟骨ト云一ヲ甲状軟骨ト云
一ヲ披裂軟骨ト云二枚他二三ノ輪状軟骨ア
リ又披裂軟骨前面ヨリ甲状軟骨ノ裡面ニ向テ
連ルニ対ス軟帯アリ又下部ノ一對ハ之ヲ喉際
軟帯ト名ク即テ是レ喉ノ孔隙ヲメ狭窄ナラシ
ムル処ノ者ニ繪壓軟骨ハ薄片ノ一軟骨ニメ
舌根ニ接ノ喉頭前ニ位置ス而シテ喉頭ニハ諸
ノ筋有テ以テ諸軟骨皆隨意ニ運動スルヲ得
又内面ニハ口内ノ表膜ヨリ展延シ来ル一種ノ
膜被ハル又膜ニハ鼻竇ノ神圣ト粘液腺ト布置

シ喉頭内軟帯ノ間ニ於テハ又膜一對ノ小囊ヲ
形成ス

第百三十七章 全中

甲状軟骨ノ前面少ク下方ニ偏スル処ニ一種ノ
腺アリ又喉中血脈甚タ多ク又壯ノ人ニ於テハ
黄色ノ汁液充盈ス之ヲ甲状腺ト名ク

第百三十八章 全下

気管ハ喉頭下端ヨリ始テ下方ニ行ク者ニ又
質十七或ハ二十個ノ輪状軟骨相重テ成リ
軟骨ハ皆輪状ニ又内面固有ノ膜是即喉頭内膜
後部隆起セリ

心被ハレ又各輪ノ互ニ接スル処及ヒ後部ノ離
開スル処ハ筋纖維有テ能ク之ヲ結着ス 此管
胸腔内ニ於テ分テ二個ノ枝トナリ内肺ニ入テ
枝極漸次ニ相分レ終ニ唯膜状ノ細管トナリ又
蜂巢状負内ニ終ル

〔注〕気管ノ右枝ハ通初右枝ニ比スルニ稍短ノ
寛

例百三十九章 第百三十一

凡大気ノ呼吸ニ要用ヲ為ス所以ノ者ハ唯其中
清気即酸負ナリ在ルアルニ由ル然レモ其内ニ可

吸者ト不可吸者トノ能ク相混合スルニ由テ以
テ入能ク其生命ヲ保続スルヲ得ル者ニ而メ
其成分合和ハ大概酸気百分ノ二十七度居リ窒
気者百分ノ七十三ニ居リ炭酸気百分一或ハ二ニ
居ル入ノ呼吸スルヤ気ノ酸負ヲ奪テ此レニ代
ルニ炭酸気ヲ呼出ス故ニ一夕ヒ呼出スル処ノ
気ハ再吸入ニ用ヲ為サス

〔注〕人ノ呼吸スルヤ氣中酸負少キモ百分ノ二
十アルヲ要スト尚之ヲ減メ甚百分一乃至
八十分一ニ至ラシムルヲ得ル此時ニ至

テハ呼吸難渋メ促追シ終ニ全ク窒塞スルニ
至ル者ナリ

第百四十一章

吸息ハ即大氣ヲ肺中ニ引クノ機動ニ夕横膈ノ
低下ト肋間内外筋内ニ外ニ動ラノ運動トニ由テ
深息ニ於テハ尚他胸腔内ニ運動スル
在ル諸筋皆此力為ニ運動スルニ胸腔ノ張潤スル
ヨリ起ル又張潤スルニ由ルヤ外部ノ氣内部
氣ト平均セシ力為ニ彈力ヲ以テ氣管ヨリ肺ノ
蜂巢質内ニ壓入シ由テ蜂巢質ノ膨脹スル力為
ニ於テ絡ヘル血脈延長メ又曲折延ヒ血行流利

甚夕容易ナルヲ得ル

第百四十一章

呼吸ハ其機動一分ハ横膈ノ弛緩メ本位ニ復ル
即チ上部ニ由テ一部ハ肋間筋ノ運動休止スル
ニ及張スニ由テ一部ハ肋間筋ノ運動休止スル
力為ニ肋骨自固ノ彈力ヲ以テ本位ニ復スルニ
由リ又氣管枝及ヒ蜂巢質ノ彈力ト腹筋ノ運動
トニ由ル者ニメ又強キ吸息ニ於テハ又脊筋ノ
連ニ由ル 凡ソ呼吸ニ由テハ肺中ノ氣皆之ヲ
排出シ尽ス者ニ非ス故ニ已ニ一タヒ呼吸スル
處ノ人ノ肺ハ水中ニ投スルニ必ス浮ヒ未生ノ

児ニ抗ケルト必ス沈ム癸レ氏又排出スル処ノ
者甚タ多シ故ニ血管聚縮ヲ曲折シ由ニ以テ心
ノ後室ニ血液流スル処ノ血行進メラレ心ノ前室
ヨリ来ル処ノ血行妨ケラル

第百四十二章

呼吸ノ用ハ最大緊要ニシテ缺クヘカラサル一ハ
又機動能ク意ニ随フト血内唯吸シ唯呼スル一
ノ成シ難キヲ以テ著明ナリ癸氏又機動ハ又意
ニ随ハスヲ成ル一ヲ得ル為ニ又理ヲ了解スル
一難シ憶フニ恐ラクハ腦ノ運動ト呼吸ト原未

固有ノ合致ヲ有スル者ナラシ

第百四十三章

呼吸ノ主用ハ血液ヲメ肺中ニ於テ生氣ト合セ
シメ其中含ム処ノ炭質ヲ排除セシムニ在リ由
テ以血液其色ヲ増ス一得ル

注呼吸第一ノ主用ハ活体ノ温暖ヲ登セシム
ルニ在ル者ナリ

第百四十四章

初生児ノ始テ呼吸スル者ハ其体中ニ感スル処
ノ非常ノ刺激ノ衝ニ游氣ニ抗ケル對抗ヨリメ胸

鳥ノ灘声ニ比スル者アリト云氏世別大ニ差フ
ル者ニメ是レ煩次整列ニ相交換スル響音ヨリ
登スル者ニ 甲状腺ハ尚他ノ喉頭及ヒ気管ニ
於ケル諸腺ト同ク其部ノ内面ヲ滑沢ナラシム
ルヲ主ル

節百四十八章

言語ハ声音ノ諸運動ニ由テ文字ノ形成ヲ得ル
者ニメ思慮ヲ外ニ登スルノ要媒ナリ言語ヨリ
形成セル文字ノ音ニ三種ノ別アリ一ヲ 聲音ト
云ヒ一ヲ 響音ト云ヒ一ヲ 液音ト云フ

中津藩 小幡明彌 書

